

むかし「局アナ」いま「隠居」

三輪車



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中



私にとっていちばん古い記憶は、一九三六〜七年に中国の新京(長春)の官舎で暮らした頃のモロモロです。「三輪車で表を走り回ると現地の中国人に攫われる」と言われ、家の前や狭い庭でしか遊ばせませんでした。当時の日本人が、武力と経済力で作った傀儡国家「満州国」ですから、中国人は、「ケツタクソが悪いから、日本人のガキでも攫うて、売り飛ばしたろやないか」と思ったのでしょうか。しかし、今でも中国では子供を攫う事件が絶えないというドキュメンタリーを観たばかりです。それによりますと子供の値段は男の子が高いそうで、働かせるだけでなく老後の面倒を看させるのが目的だと伝えていました。昔は日本にも「人攫い」がいましたが、未だに中国で子供の売買をしているのは、一人っ子を失った親達が、「何が何でも子供が欲しい」と思い詰めてしまう…つまり「一人っ子政策」の後遺症かも知れません。

そんな新京へ、はるばる徳島から祖父が訪ねてきたことがあります。優しい「ジイちゃん」は、八人の孫のうち、最年少の孫だった私の頼みは何でも聞いてくれる人でした。ですから、ジイちゃんと一緒に三輪車で散歩すれば、どんな遠い所へ出かけても私の「ガードマン」となって、攫われる心配はなからうと親も安心して、一人っ子の私をジイちゃんに預けてくれたのです。調子に乗った私は一日に何度も官舎の外を走り回り、自分の家が目に入った途端、三輪車を放り出して、「お母ちゃん」と叫んで駆け出すのです。「博章と散歩しよつてもな、家が見えた途端に三輪車を放り出しよる」ジイちゃんは笑いながら身体を斜めにして三輪車を提げて帰るのでした。



子供用の三輪車なのに、「三輪車」とは呼ばれない三輪車があります。私が子供の頃は、これを「スケート(左図の上)」と呼んでいました。車輪は前に一つ、後ろに二つ付いていたのですが、今は前後に一輪ずつ付いた「二輪車が主流で、名前も「キックボード」というのだそうです。調べてみますと、今でも「三輪」のキックボードはあるようで、右図ピンクのように前輪が二つ、後輪は一つ…つまり前後の車輪が昔のスケートと逆になっていました。



昭和を象徴するトラックと言つていいでしょう。実は私、豊中市内の木造アパートから、いまの家に引っ越したとき「小型三輪トラック」に相乗りして、やつて来たのです。運転手のお兄さんの隣に座らせてもらったものの、ドアがないので吹き曝し、水平に伸びる 細い一本の鉄棒が 手摺になっていて、その向こうは往来でした。信号待ちで停車したとき、商店のショーウィンドウに私の乗った三輪トラックが映っています。



【三輪トラック】



トラックの荷台は空っぽ：いや、よく見ると茶色の布団袋の先つちよが覗いているのですが、それ以外は何も見えません。「地味な引越しじゃなあ。まるで夜逃げじゃ…」

確かにあのころは、外食一辺倒の無頓着な独身生活だったこともあって、荷物らしい荷物は布団袋だけ、他に目ぼしいものといえは自分で組み立てたラジオと小さな火鉢、電気スタンド、洗面器程度で、本棚も机も座布団もありませんでした。あのアパートには殆んど居住していなかったという証拠でしようか。

＊ 「三輪の乗り物」といえば、懐かしの「輪タク」があります。

お若い方はピンと来ないかもしれませんが、早い話、「自転車で漕ぐタクシー」のことで、敗戦直後は故郷の徳島でも「輪タク」をよく見かけました。

自転車の横に客が乗る…何しろ自動車もガソリンもお金もない時代でしたから、

徳島駅前の西側一帯には、輪タクがズラリと並んで客待ちをしていたのです。「本物のタクシー」というか、ガソリンで走るタクシーは戦後しばらく見ることがありませんでした。ウチは貧乏でしたから、輪タクに乗ったことはないのですが、家内は一度だけ乗ったことがあるそうです。



輪タク

＊ 大店の親戚の家へ行った帰りに雨が降ってきたので、店のツケで輪タクを呼んでくれたのでした。

母親が一緒だったので、二人で乗ってもいいのか、恐る恐る訊ねたところ、「ええ、二人ともこんまいけん、かんまんでよ」と快く乗せてくれたのですが、乗り心地はあまり良くなかったそうです。

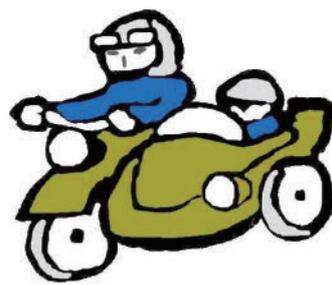
いくら母子が小柄でも二人だと窮屈でしょうし、敗戦直後の道路は、殆んど舗装されていませんから、かなりガタガタ揺られたに違いありません。もう輪タクに乗ることも見ることもできませんが、東南アジアでは、輪タクが活躍しているのをテレビでよく見かけます。

自転車の前に客を乗せるタイプとか、後ろに乗せて引張るタイプなど日本の輪タクとはかなり構造が異なりますが、客が外からまる見えのものが多く、赤道に近いので、防寒より風通しが優先されるからなのでしょう。



日本の輪タクとよく似た構造の三輪バイク「サイドカー」というのがあります。製造中止になったのか、近ごろサイドカーの姿など見たことはありません。

戦局が悪くなったころ、昭和天皇が必勝祈願のため明治神宮に参拝するとき、私たち神宮周辺の国民学校では銀杏並木の歩道に整列して出迎えていたのです。そんなとき先導するのがサイドカーでした。



陛下の車が近づき沿道に並んだ学童が次々と最敬礼すると、天皇サイドからは坊主頭のウエーブが見えるわけです。

当時、天皇は現人神で、「見たら眼が潰れるぞ」と教える教師がいたり、「最敬礼は眼の防御だ」なんて、せせら笑う奴がいたり…そんな時代でした。今どきサイドカーを見て、

近衛兵や憲兵、ヒトラーの親衛隊を連想して、何だか威圧感を受ける私は一種の戦争恐怖症かもしれせん。

戦争を知らない 安倍晋三さんに笑われそうです。

＊ 車椅子の中にも、車輪が三つというのがありました。パラリンピックのとき、トラックレースで疾走するあの三輪車です。

二つの車輪が後ろにあり、前の車輪はぐつと先に突き出して、お尻を支えている二つの後輪は「八の字」になっっていました。



トラックレースに限らず、多くのスポーツ用車椅子の後輪も八の字です。

＊ ネットで調べたところ、あの傾きは「キャンバー」といって、大きく傾けるほどグリグリ廻りにくくなり、安定感が増すとありました。そういえば、旧制の徳島中学の物象(物理)で習ったような気がします。

「四輪自動車の前輪は「八の字の逆」になっているので、ステアリングがスムーズに操作できる」と。